

『洛中洛外図屏風』に描かれた中世京都の商人和職人

お茶の水女子大学

大藪 海

中世日本の首都であった京都には、どのような商人や職人がいたのか—その疑問を、中世の京都を描いたとされる『洛中洛外図屏風』を読み解くことにより解決しようとするのが、本報告の目的である。

日本中世の商人や職人に関する研究は、1980 年代に盛んに行われたものの、以降は下火となってしまっている。その原因の一つに、文字史料（古文書・古記録）の絶対的な不足が挙げられる（桜井英治「中世の技術と労働」『岩波講座日本歴史』9、岩波書店、2015 年、所収）。それでも現在まで少しずつながら研究が進展しているのは、絵画史料や都市遺跡から発掘された考古史料の存在が大きい。そしてそのなかでも『洛中洛外図屏風（らくちゅうらくがいずびょうぶ）』は、商人や職人の姿のみならず、中世京都の都市民の様子を私たちに視覚的に伝えてくれる、希有な史料である。

『洛中洛外図屏風』とは、地域的にはおおむね東朱雀大路以西と大宮大路以東の「洛中」と、その周辺に広がる地域である「洛外」を描いた屏風である。近世に入って様々な『洛中洛外図屏風』が制作され、その数は 100 点以上にのぼるとされている。しかし中世の京都を描いたとみられるものは 4 点（写を 1 点含む）しか現存していない（小島道裕『描かれた戦国の京都 洛中洛外図屏風を読む』吉川弘文館、2009 年など）。このうち最古のものが、現在国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）に所蔵されている『洛中洛外図屏風歴博甲本』（以下、「歴博甲本」と称す）である。

この「歴博甲本」については、近年国立歴史民俗博物館で研究プロジェクトが組織され、『人間文化研究機構連携展示 都市を描く—京都と江戸—』においてその成果が公開・展示された。報告者もそのプロジェクトの末席に連なり、「洛中洛外図屏風「歴博甲本」人物データベース」（http://www.rekihaku.ac.jp/rakuchu-rakugai/DB/kohon_research/kohon_people_DB.php）の作成、および展示物の制作に携わった（拙稿「洛中洛外図屏風歴博甲本人物データベース各項目の立項方法と入力語」『国立歴史民俗博物館研究報告』180、2014 年）。その過程で、「歴博甲本」には多くの商人や職人が描かれ、しかもその一部については、現存する中世京都を描いた他の『洛中洛外図屏風』にも同様に描かれていることを確認した。つまり「歴博甲本」は、数ある『洛中洛外図屏風』の“祖本”ともいえるべきものに位置付けられると考えられるのである。

以上の見通しに基づき本報告では、「歴博甲本」を主に使用して、そこにはどのような商人や職人が描かれているのかを改めて確認・分析し、中世京都における彼らの活動を垣間見たい。さらに、彼らが扱っている商品にも注目することで、中世京都における商工業活動についても、考察する手がかりを得たいと考えている。